

御霊（聖霊）による歩み

2006. 10. 31 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ローマ人への手紙 7章14節から8章16節

私たちは、律法が霊的なものであることを知っています。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。肉に従う者は肉的なことをもつぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中ではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。もしキリストがあなたがたのうちに住まれるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうち

に住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。

ガラテヤ人への手紙 5章16節から18節

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。

ガラテヤ人への手紙 5章24節、25節

キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。

先週金曜日ドイツから戻ったとき、電話がありました。T姉妹と妹であるM姉妹からの電話でした。M姉妹のご主人Y兄弟は重病人ですので、「ベック兄、お疲れのところを申し訳ありませんが、おいで願えないでしょうか」と。「明日はメサイア公演ですし、日曜日は吉祥寺で話さなくてはいけなし、月曜日は自分のことで病院に行かなくてはいけなし、火曜日はまた集会があります。早く行けたとしても水曜日ですね」と言ったのです。ですから、明日行くつもりですが、見舞いのためではなくて、実は、葬儀のためなのです。結果としては、Y兄弟は召されたのです。姉妹も子どもも、もう何十年間もご主人の救いについて祈り続けました。そして一週間前に、心開いて受け入れたのです。召され方があまり素晴らしかったので、M姉妹も息子も嬉しくて嬉しくてしかたがなかったようです。ですから、この葬儀もやはり「喜びの集い」ということになるのではないのでしょうか。

何年前だったのでしょうか。N姉妹のご主人の葬儀のとき、彼女は葬儀の前に言われたのです。「今日の主人の葬儀は、『喜びの集い』になってもらいたい」と。そういう気持ちを持つことができれば素晴らしいのではないのでしょうか。沖縄からも、いろいろな人が出席されるということです。何十年か前に何回も集会に出ても決心されなかった人も見えるようになります。明日の葬儀は大阪で行なわれますが、是非覚えていてください。

多くの姉妹たちは、ご主人たちの救いのために祈っています。叫んでいます。何年間、何十年間も。しかし、諦める必要はありません。今朝もある姉妹から電話があり、彼女の

ご主人も友だちのご主人も、三十年間お互いのことを知っているようですが、今は主の救いは結構ですという態度をとっています。結局救いについて考えていないので、おそらく宗教について、習慣についてとしてしか考えていないのでしょうか。ちょっとかわいそうではないでしょうか。こういう態度をとる人たちはまだ元気過ぎます。(笑) まだ弱り果てていないということだけなのです。

「救い」とは、救い主を持つことです。この唯一の救い主は、「わたしは道そのものです。唯一の道です。唯一の真理です。唯一のいのちそのものです」と言われました。

「わたしを通してでなければ、だれも父のところに行くことはできません」。この文章は、世界中の人たちがあまり受け入れたくないのです。「どこの宗教でもいいではないか」。

この間、ドイツである男に出会いました。彼はモンゴルへ行ったのです。半年間だったのでしょうか。そして、仏教のことを徹底的に研究したらしいです。「仏教もなかなか良いことを言っているではないか」。「もちろんそうかもしれませんが。けれど、十字架がないでしょう」。「ああ、確かにそうです」。

結局、十字架がなければ、まことの救いはあり得ません。「不可能が可能になる」と、イエス様は約束してくださいました。つまり、「天国か」、「地獄か」のどちらかです。いつも、これを問うべきではないでしょうか。ドイツで、あるパンフレットをもらいました。題名は、『あなたは地獄へ行くために何をしたらよいのでしょうか』。(いい題名でしょう?) 答えは何も書いてありません。(何もしなくてもそのままだったら地獄だよ、と。)(笑)

ですから、聖書は厳しく、「求めなさい」「本物を求めなさい!」と語っているのです。本物を求めれば、当然、壁にぶつかります。人間は、罪滅ぼしのために何もできません。本物とは、「罪の赦し」です。「神との平和」です。「永遠のいのち」です。求めれば、必ず与えられるのです。

今日読んでいただいた箇所は、ちょっと長かったので兄弟は気の毒でした。この二箇所の内容は、「信じる者にとって大切なのは何であるか」ということです。

救われることだけでは十分ではありません。御霊によって歩まなければ、御霊に導かれて、「御霊に支配されて歩まなければならない」ということが強調されています。

イエス様を信じる兄弟姉妹の歩みについて考えると、二つの歩み方があります。

一つは、「肉による歩み」。もう一つは、「御霊による歩み」です。

イエス様を自分の救い主として受け入れればそれで十分だ、と考えている人はたくさんいますが、イエス様は、「それでは十分ではない。御霊による歩みをしなければならない」と教えておられます。

読んでいただきましたローマ書8章の8節、9節をもう一度お読みしましょう。

ローマ人への手紙 8章8節、9節前半

肉にある者は神を喜ばせることができません。けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。

かつてイエス様が地上におられたとき、イエス様と一緒に歩んだ弟子たちは、素晴らしい主の御力を目で見、耳で聞き、経験しました。イエス様と一緒に歩いた弟子たちは、どんな困難がやって来ても行き詰まったことはありませんでした。欠乏を知りませんでした。病気の悩みは、ともにおられるイエス様の御手によって、全部癒されたのです。どんなにイエス様の敵が向かって来ても、イエス様の前では手も足も出せませんでした。

こんにち私たち主イエス様を信じる者にとっても、このイエス様の力が現実のものとならなければなりません。また、イエス様と一つになるならば、現実のものとする事ができるのです。

私たちのあらゆる問題はイエス様によって全く消え、イエス様のみそば近くにはべることにより、主のご臨在、主の平安が私たちの心を支配し、限りない主の力が私たちのうちを満たしてください。

ある時、イエス様は弟子たちに、「わたしはやがて天に帰ります。けれど、わたしの代わりに、わたしはあなたがたに「助け主」を与えます。その方は、あなたがたを導き、力づけるのです。わたしが天に行くことは、かえってあなたがたのために益なのです」と言われました。

弟子たちはこれを聞いて驚いたに違いありません。どういう意味か全く分からなかったはずですが、五旬節のときに、弟子たちは主が約束された御霊の降臨を受け、御霊に満たされたのです。御霊でいっぱいになったのです。弟子たちは神の宮となりました。聖霊をうちに宿す者となったのです。

同じように、御霊は私たちのうちにも宿っておられます。コリント第一の手紙の中で、私たちにも当てはまることばが書き記されています。

コリント人への手紙・第一 3章16節

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。

「どうして忘れたの？」。

コリント人への手紙・第一 6章19節、20節

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

とあります。

生けるまことの神が私たちのうちに宿っておられるのですから、私たちはこの世における一番の財産家と言わなければならないのです。

けれども今日の問題は、御霊を宿してはいるが、果たして私たちは肉によって歩んでいるのか、または、霊によって歩んでいるのか、ということです。聖書に書いてある「御霊による歩み」を、私たちはすでに自分のものとして実行しているでしょうか。

主の一番お喜びになる私たちの叫びは、「主よ、私はあわれな存在です。どうかあわれんでください」という叫びである、と聖書は語っています。もし、ここまで主の御前に碎かれるなら、御霊による歩みに入ることは、そう難しくありません。人間の目から見ると、全く打ちのめされたあわれな状態が、主の目からご覧になると、解放のよいチャンスに見えるのです。

次の三つの点に分けて考えてみたいと思います。

1. 霊肉の戦いについて。
2. いのちである主イエス様について。
3. 聖霊の法則について。

1. いったいなぜ信じる者の間に、違いがあるのでしょうか。同じ御救いに預かり、同じ御霊を受けていながら、ある人は霊的であり、ある人は肉적입니다。

その訳は、どのキリスト者も二つの性質を持っているからです。霊的なキリスト者は肉に打ち勝っているのであり、肉的なキリスト者は肉に打ち負かされているのです。これが私たちの間にも見られる違いの原因です。

この二つの性質を持っているということを、私たちは経験によって知っています。つまり、心のうちに二つの掟があり、一つは罪に引き込まうとし、一つは主イエス様に私たちを引き上げ、高めようとし、一つは古い罪とアダムの性質であり、もう一つは新しい霊的な主イエス様の性質です。

生まれながらの性質は、罪を犯すことしかできません。それは、魚が水の中でしか生きることができないように、古い性質は罪の中に溺れているのです。そして、この古い性質は、主を認めず、主に従わず、主に喜ばれません。この性質が、私たちの中に死ぬまで残っています。

けれど、私たち信じる者のうちには、イエス様を受け入れることにより、罪を犯すことのできない新しい性質も与えられています。この新しい性質は、主を認め、主に従い、主に喜ばれる性質です。この新しい性質は、聖霊によってのみ与えられます。

イエス様を信じる者となっても、生まれながらの性質を持ちながら、一方では聖霊による全く新しい性質も合わせ持っているのですから、霊肉の戦いが始まるのです。

多くのキリスト者はこの戦いを戦って疲れ、勝利の生活は不可能であると言って、絶望してしまいます。また、ある人は戦いをやめて、この世を愛する者になってしまいます。パウロのように、ローマ書の勝利の声をあげる人は極めて少ないようです。前に読みましたローマ書8章1節、2節です。

ローマ人への手紙 8章1節、2節

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

それはどういうわけでしょうか。それは主を信じる多くの者は、肉の性質は良いところ

が一つもないということを深く知っていないからです。私たちはたましいの中核から全体、隅から隅まで全く罪にまみれている存在です。前に読まれたローマ書7章18節です。

ローマ人への手紙 7章18節前半

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。

教えられたからではなく、経験したからです。

「肉による歩み」とは、自らの力で何かすることであり、そのように続くとき、主の勝利を自分のものとするのができません。主イエス様の勝利は、私たちが御霊によって歩んでいるときに、初めて経験することができるのです。

「御霊による歩み」とは、うちに住んでおられる御霊に、「自分は何もできません。あなたにすべてをおゆだねします」と言って、内住の主にすべてをゆだねて歩む歩みを言います。その時、主を認め、主に従い、主に喜ばれる生涯を送ることができるのです。

私たちは、まだ自らの力に頼り、肉によって歩んでいるのでしょうか。もちろんイエス様に仕えるには、良い肉をもって仕えるでしょう。パウロの生きていた時代の信者がそうでした。ピリピ人への手紙を読むと、次のように書かれています。

ピリピ人への手紙 1章17節

他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。

ピリピ人への手紙 3章2節、3節

どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼の者に気をつけてください。神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。

犬とは、悪い働き人です。また、ピリピ書の3章18節です。

ピリピ人への手紙 3章18節、19節

というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。

「イエス様の敵」ではありません。「キリストの十字架の敵」として歩んでいるからです。それが良い肉であっても、悪い肉であっても、生まれながらの肉である限り、イエス様の御前には厭うべきもの、嫌われるべきもの、憎むべきものなのです。

イエス様を信じる多くの者は、自分で意識しないかもしれませんが、自分の力で、自分のために、自分によっていろいろなことをしています。

イエス様は私たちの身代わりに死なれ、よみがえられ、そして、高き御座にのぼられ、そこから私たちに聖い霊をお注ぎくださいました。それは、私たちを変えて、御霊により、主のために御霊を通してすべてのことを行なうようになるため、私たちが御霊によって歩

むようになるためだったのです。

何か事が起こるとすぐにいつも主の御前に行き、「私には何もできません。あなたは私のうちにある柔和であり、謙遜であり、愛であり、すべてですから、どうかあなたがこのことに解決を与えてください」という歩みが、御霊によって歩む人の特徴です。

私たちは、ときに次のようなことを経験したかもしれません。自分の生まれながらの性質を恐れて、何とかしてそこから抜け出したいと考え、主におゆだねして、全く任せきります。あとから気が付いてみると、知らず知らずのうちに古い性質が出ないで済んでいた。このような経験をなさった方がいるかもしれませんが、もしそれが一時的であるなら、御霊による歩みとは言えません。常に古き人に打ち勝って行って初めて、御霊によって歩んでいると言えるのです。御霊による歩みの中に入りますと、勝利を得たいと戦うことが終わり、イエス様の勝利のうちに休むことができます。

内住の主すべてをおゆだねし、主にすべてをしていただくという任せきった生活が、御霊による歩みです。もうすでに旧約聖書の中で次のように書かれています。出エジプト記の14章。13節からお読みいたします。

出エジプト記 14章13節、14節

それでモーセは民に言った。「恐れてはいけない。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行なわれる主の救いを見なさい。あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。」

「立って、主の救いを見なさい」。

ある時、T姉妹はなかなかよいことを言ったのです。「私は頑張りません」。頑張っても何もならないと分かったからです。いくら頑張っても疲れるだけなのです。「しっかり立って、主の救いを見なさい」。

イスラエルの民は、自分で何かをなそうと努力しません。主が何をなし給うかを、ただ主にゆだねて見ただけでした。

昔の話ですが、日本と中国が戦ったとき、日本兵は戦車をたくさん使いました。中国の兵隊は何とかして戦車を駄目にしようと考え、狙撃兵を組織し、面白い戦法を考えました。それは、日本の戦車がやって来ると、一発だけ鉄砲を撃ちます。すると戦車は立ち止まって、どこから弾が来るか見極めようとします。やがてしばらく経って、また一発撃ちます。そのうちに戦車の中にいる兵隊は面倒臭くなって戦車から首を出し、弾の来る方向を見定めようとして出て来ます。それを狙って兵隊を殺し、戦車を分捕るという戦法でした。

これと全く同じように、悪魔が用いる戦法は、いつも信じる者の己を外に出させようとするのです。悪魔の手に乗り、うっかり自分を高めると、また、自分で何かをやろうとすると、失敗して打ちのめされてしまいます。

もし、私たちが無力になって、何もしなければ、御霊が代わりにやってくれます。その時初めて、勝利の生活を送ることができるのです。

ですから、パウロは、前に読んでいただきましたガラテヤ書5章で信者たちに、御霊による歩みをするようにと切に願ったのです。もう一度読みましょう。

ガラテヤ人への手紙 5章16節から18節

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。

いくら頑張っても、「自分のしたいと思うことを、することができない」のです。

ガラテヤ人への手紙 5章24節、25節

キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。

御霊による歩みとは、前に話しましたように、戦いが止み、御霊が私たちのうちに、また、私たちを通してなされる主のみわざを見て生活することを意味します。

2. いのちである主イエス様について、次に考えたいと思います。

パウロは霊肉の戦いが終わったとき、ローマ書7章25節で次のように喜びの声をあげたのです。

ローマ人への手紙 7章25節前半

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

「私は何というみじめな人間なのだろう」と言う男は、急に喜びに満たされて言うことができたのです。「私たちの主イエス・キリストのゆえに、神に感謝します」と。

これと同じ意味を持っているみことばが、ガラテヤ書の2章20節にあります。みな暗記している、最も大切なみことばの一つなのではないでしょうか。

ガラテヤ人への手紙 2章20節前半

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

パウロは、キリスト者のいのちはイエス様のいのちであるべきだ、と言っています。信じる者のいのちは、今まで持っていたいのちよりましないのちではなく、御霊によって新しく与えられた「イエス様のいのち」でなければなりません。

新しく生まれるということは、良くなったことではなく、イエス様ご自身が御霊によって私たちのうちにお入りになったことを意味します。

けれど、うちに与えられたこの新しいいのちはそのままであって良いのではなく、いよ

いよ成長して、外に現わされていかなければならないのです。パウロはこの点がガラテヤの信者たちに欠けていることを知り、彼らのために悩み、苦しみました。

ガラテヤ人への手紙 4章19節

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。

この主の恵みによって救われ、主の御救いにあずかるようになった兄弟姉妹が、パウロの悩みの種になりました。

あるところにイエス様を信じる夫婦がいました。子どもがいて、その教育に心を悩ませていました。自分たちには子どもを教育するのに、あまりにも忍耐が足りなさぎると考えていました。そこで、知り合いの兄弟を招き、このために祈ってくれるように頼みました。するとその兄弟は、夫婦に何と言ったかと言いますと、「祈っても、おそらく聞き届けられないでしょう」と。夫婦はもちろん驚いたのです。その訳を尋ねますと、兄弟が言うには、「あなたがたに必要なのは忍耐ではなく、『イエス様ご自身』です。忍耐、謙遜、柔和、愛、それらは、ばらばらに与えられるものではありません。イエス様ご自身をうちに宿すとき、ともに与えられるものですから」と説明したのです。

私たちがイエス様に宿っていただくとき、私たちの必要な謙遜、柔和、愛、節制、その他のあらゆる徳は、イエス様のいのちとともに、私たちのうちに与えられるのです。

例えば、「永遠のいのち」とは、いったい何でしょうか。物ではありません。「イエス様ご自身」です。ヨハネ第一の手紙の5章を読むと、ヨハネは次のように書いたのです。

ヨハネの手紙・第一 5章11節、12節

そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。

イエス様はいのちであり、聖さであり、謙遜であり、愛です。では聖さとは何でしょう。私たちはだんだん聖くなっていくと考えますが、それは聖さの実です。聖さは、イエス様ご自身です。コリント第一の手紙の1章30節。何回も引用した大切なみことばです。

コリント人への手紙・第一 1章30節

しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。

私たちは、忍耐を必要としているのでしょうか。忍耐は、「イエス様ご自身」です。

私たちに愛や聖さが欠けているのでしょうか。イエス様ご自身が、愛と聖さなのです。イエス様ご自身は、私たちの持っているありとあらゆる問題の答えとなってくださいます。パウロは、「キリストは私のいのちである」と告白したのです。私たちも、いよいよこの驚くべき現実に心の目を開いていきたいものです。

「主よ。私は、自分の力では、あなたのみこころにかなう生活を送ることができません。どうか、うちに住んでおられる御霊が私を導いて、みこころにかなう歩みをなさしてください」。このように砕かれた、主にお任せする生涯に入るなら、本当に幸いです。

3. 最後に短く、聖霊の法則について、ちょっとだけ考えたいと思います。

司会の兄弟に読んでいただきましたローマ書8章1節、2節を見ると、この聖霊の法則について書かれています。

ローマ人への手紙 8章1節、2節

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

とあります。

パウロは生まれ変わって信者になってから長い間、罪に定められているような重い空気の中に住んでいたようです。そしてどんなに自分で努めても、みこころにかなった歩みをする事ができないと悟っていました。その経験を彼はローマ書8章8節に言っています。

ローマ人への手紙 8章8節

肉にある者は神を喜ばせることができません。

また、前に引用したローマ書7章24節で、

ローマ人への手紙 7章24節前半

私は、ほんとうにみじめな人間です。

と。

この同じパウロが、ピリピ人への手紙4章13節で、全く違うことを言うようになったのです。ローマの刑務所の中で書いた証しです。

ピリピ人への手紙 4章13節

私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。

このような大きな変化が、なぜパウロのうちに起こったのでしょうか。その答えは、今読みましたローマ書の8章1節と2節に書かれています。御霊の法則、御霊の原理は、罪と死の原理より、さらにまさって強いのです。

ここで少し、この二つの法則、二つの原理を見てみましょう。

法則、原理とは、いったい何なのでしょう。法則とは、私たちがいつも繰り返すことです。

例えば、人間の定めた法則は、いつも繰り返し同じように守らなければならないのです。自動車で行くとき、今日左側を走り、明日右側を走ってよいということはありません。いつも左側通行を守らなければ罰せられます。法則には例外が無いからです。自然法則も

同じです。アメリカに行っても、ロシアに行っても、東京にいても、本を落とせば下に落ちます。例外なく下へ落ちます。それは引力があるからです。

引力の法則に似た法則が、私たちの心の中にもあります。生まれながらの古い性質は、いつもこの世のことしか思いません。パウロはいわゆる伝道者に向かってさえ言いました。「彼らの思いは地上のことだけです」と。

けれど、私たちは古い性質を持っていても、「地上のものを思わないで、上のものを求めなさい」というコロサイ書の3章2節のみことばを心に留め、天的なものの中に無限に成長していかなければなりません。新しい性質は、地のものを求めようとしません。しかし、私たちは死ぬまで罪と死の法則を心のうちに宿しています。これは、パウロも深く経験したことです。

前に読んでいただきましたローマ書の7章18節から24節までを見ると分かります。パウロは本当に戦いました。「私はほんとうにみじめな人間です。救われた者として。主の恵みを経験した者として」。

けれども、問題は、私たち主イエス様を信じる者はいかにしてこの罪と死の原理、法則から解放されるか、ということです。法則が別のものに変えられるか、また、その法則を支配するさらに強い法則が定められないかぎり、前の法則から解放されることはできません。

人間の法則はもちろん簡単に変えられます。私はドイツへ帰って車で左側を走るなら、すぐ罰せられます。日本で右側を走れば、それもまた罰せられます。人間の手で作った法則は簡単に、時と場所が変われば変わります。万有引力の法則があっても、本を手で支えていたら、決して下へは落ちません。引力より手の力が強いからです。

同じように、信じる者のうちに罪と死の法則が潜んでいます。それは、違うより強い法則によって留められているのです。ローマ書8章2節です。

ローマ人への手紙 8章2節

キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

とあります。

御霊によって、主イエス様は私たちのうちに住んでおられ、私たちは主のよみがえりの力にもあずかっているのです。この事実には心目が開かれれば幸いです。

けれども、この御霊の原理、法則は、いかにして私たちの外に現われるのでしょうか。即ち、御霊の原理の現われについてもうちよつと考えましょう。

何十年か前に、いろいろな人がドイツ語を習いに来ました。ドイツ語を読むのに苦労しますが、私にとってはドイツ語は母国語ですから、読むのは本当に極めて簡単です。反対も同じことです。私が日本語を読むのは極めて難しいことですが、日本人が日本語を読むのは、母国語ですから、本当に簡単なことです。

同じように、もし、主イエス様が私たちのいのちなら、御霊は私たちの出来ないことを

簡単にしてくださいませ。そのとき、罪と死の法則は、力を少しも外に出すことが出来ません。

パウロは、このような勝利に到達するまでに長い時を要したようです。ですからローマ書7章18節に、

ローマ人への手紙 7章18節

**私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。
私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。**

パウロは長い間、勝利を自分の良い意思でしようと努力しましたが、パウロがそのような努めている間、主をお喜ばせることはできなかったのです。ただ、主を悲しませるばかりでした。

多くの兄弟姉妹は、良い意思を持って何とかしてクリスチャンらしい生活を全うしようと考えますが、それはちょうど、ガソリンの無い自動車を押して歩くようなものであり、大変な骨折りです。ローマ書6章の最後の節です。

ローマ人への手紙 6章23節後半

神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

ローマ人への手紙 8章2節

キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

とあります。この二つのみことばは、同じ賜物について書かれているのです。

私たちは勝利の生活を送るために、新しい賜物を受ける必要はありません。しかし、勝利の生活を送るために、イエス様がすでに与えてくださった賜物に、心の目を開くことが大切です。イエス様は、私たちにすべてを与えてくださったのです。私たちは主が与えてくださったものに向かって、目を開きさえすれば良いのです。

このローマ書8章2節には、「解放したからである」と過去形で書かれています。これを読むと、自らの努力は全くむなしい。そればかりではなく、妨げであることが分かります。

主にとって大嫌いなことばの一つは、「頑張る」ということばではないでしょうか。もし、私たちが自分の努力とすべての意志とを主に明け渡すならば、実際生活において御霊の原理がいかに力強いかを経験するはずです。

イエス様は山上の垂訓で、「空の鳥を見よ」と言われました。けれど、あの鳥に、「万有引力の法則を知らないのか。よく落ちないで空を飛んでいることができるものだ」と声を掛けることができるならば、鳥は何と言うのでしょうか。「自分は引力もニュートンも知らない。このように飛んでいるのは、私、鳥が持っている本来の性質だからだ」と答えるに違いありません。けれど、鳥にも引力の法則が働いているのです。鳥が病気になり、飛ぶ力が無くなれば、地に落ちてしまいます。

イエス様が本当に私たちのいのちになっているなら、御霊の法則は、罪と死の法則より強いということが分かります。御霊が私たちのうちに満ちておられるなら、主のみこころにかなう生活をするには、実に簡単なことです。私たちの意思、努力でするのではなく、私たちのうちに住んでおられる御霊が、みこころにかなう生活をなさせてくださるのです。

忍耐のない者が忍耐を持つように努めるのは、大変な戦いです。戦いの結果は絶望です。けれど、聖書は私たちの努力をもってしては、決して主のみこころにかなう歩みはできないと教えています。

またイエス様は、私たちが生まれつきの性質でできないことをよく知っておられ、そのために御霊を遣わしてくださいました。私たちは与えられたキリスト・イエスにあるいのちの御霊の原理をもって、善悪をわきまえることができます。

みこころにかなう生活をするために、教育や教養を積んでもできません。ただ、私たちのうちに住んでおられる主ご自身によってのみ、みこころにかなう生活ができるのです。

その時、自分の話した声が大き過ぎた。この笑い方はいけなかった。こうしたことは誤った動機だったなどと、いろいろ御霊によって教えられます。どんなに自分が注意して努力しても、自分の歩みを正しく保つことはできません。桃の木は桃の木です。よく話す人はよく話します。生まれつきの性質だからです。

御霊の新しい、強い法則に目を開かなければ、決して自らの古い性質を直すことはできません。私たちのうちに宿っておられるイエス様は、ご自分で私たちの生活を自由に導いてくださるのです。

もし、だれか愛することができない人がいるならば、主に、「どうかイエス様、あなたによってあの人を愛させてください」と祈るなら、御霊の法則がどんなに強いかわかるようになるのです。

このローマ書8章3節、4節をもう一度読みましょう。

ローマ人への手紙 8章3節、4節

肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。

ここでは二つのことが書かれています。

一つは、イエス様が私たちのために、もうすでに何をなしてくださったか。

二番目に、イエス様は私たちのうちに、何をなそうと願っておられるかについて書かれています。

1. イエス様は罪と死の法則を無力にするため、罪を担って死なれたのです。そして、内住の御霊が掟を全うなさることにより、御霊の原理が、罪と死の原理より強いことが分かります。

もし、私たちが霊によって歩むなら、内住の主イエス様ご自身が、みこころにかなった歩みをなさせてくださることをはっきりと知るようになります。

霊による歩みとは、いったい何を意味しているのでしょうか。

それは一つの働きではなく、歩みです。かつて、「みこころにかなおう」として戦い、努力していましたが、今は、うちに住んでおられるイエス様がすべてをなしてくださるのです。

パウロは、「肉による働き」と「御霊の実」という二つのことばを使っています。私たちは自分の力によって、肉によって努力することはできますが、そのときは実を結ぶことなどはできません。御霊の実は、内住の主に結ばれているものです。

2. 御霊による歩みは、全く御霊に従うことの結果なのです。

肉による歩みは、肉に従っていることを意味しているのです。

ローマ人への手紙 8章5節から8節

肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。

霊による歩みは、霊に従っていることを意味します。霊に従って歩むとき、初めて御霊の法則の力を知ることができ、現わすことができ、パウロのように、「我はキリストとともに十字架につけられたり。我もはや生きるにあらず、キリスト我がうちにありて生きるなり」と言うことができるのです。

御霊のご支配のうちに全く自分の身をゆだねて、初めて御霊による歩みができるのです。

最後にもう一箇所読んで終わらしましょう。コリント第二の手紙の13章13節です。

コリント人への手紙・第二 13章13節

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。

神の愛はあらゆる霊的祝福の源です。イエス様の恵みにより、すべての祝福は私たちのものとなるべく備えられています。そして、御霊との交わりは、この測り知れない富を私たちのものとする道です。

御霊は、私たちに、イエス様のお持ちになられているあらゆる富を与えるためにおいでになられたのです。私たちは信者になったとき、同時に聖霊を宿している神の宮となりました。

御霊は神のみこころを私たちに示し、私たちを導き、祈らせるために、私たちのうちに住んでおられます。私たちは、御霊が私たちの支配者であることを感謝し、その支配にすべてをゆだねたいものです。

ある寂しい地に住んでいる夫婦がいました。そして一人の旅人を通して救いにあずかるようになりました。旅人はもちろん、また去らなければならなかったのですが、そのとき、「今から大切なのは、あなたがたは自分のものではないこと、うちに住んでおられる聖霊の宮であることを知ることです」と言って立ち去りました。旅人が帰ってから、主人は祈ろうと思っていたのですが、祈れません。いろいろ原因を考えますと、今までたくさん飲んでた酒がみこころにかなわないのではないかと気付きました。それで、奥さんと一緒に聖書を調べ、酒について書かれているところを探したのですが、まだ信仰を持ったばかりですから、結局、探しても見つかりません。けれど、うちにささやく声は、「酒をやめる」ということです。主人は奥さんに頼んで酒を隠してもらったところ、また自由になり祈ることができたのです。後になり、以前に来たことのあった旅人がもう一度自分のところへやって来ました。夫婦はその旅人に、その酒のことを話しました。「あなたもいない。聖書も分からない。困った。けれど、心の中に住んでおられるお方に聞き従ったから助かった」と言いました。旅人は、「その心のうちに住んでおられるお方にいつも従っていれば大丈夫だよ」と答えたのです。

私たちは、うちに住んでおられる主を個人的にはっきりと知っているのでしょうか。そして、うちに住んでおられる御霊の声に、単純に聞き従っているのでしょうか。

了